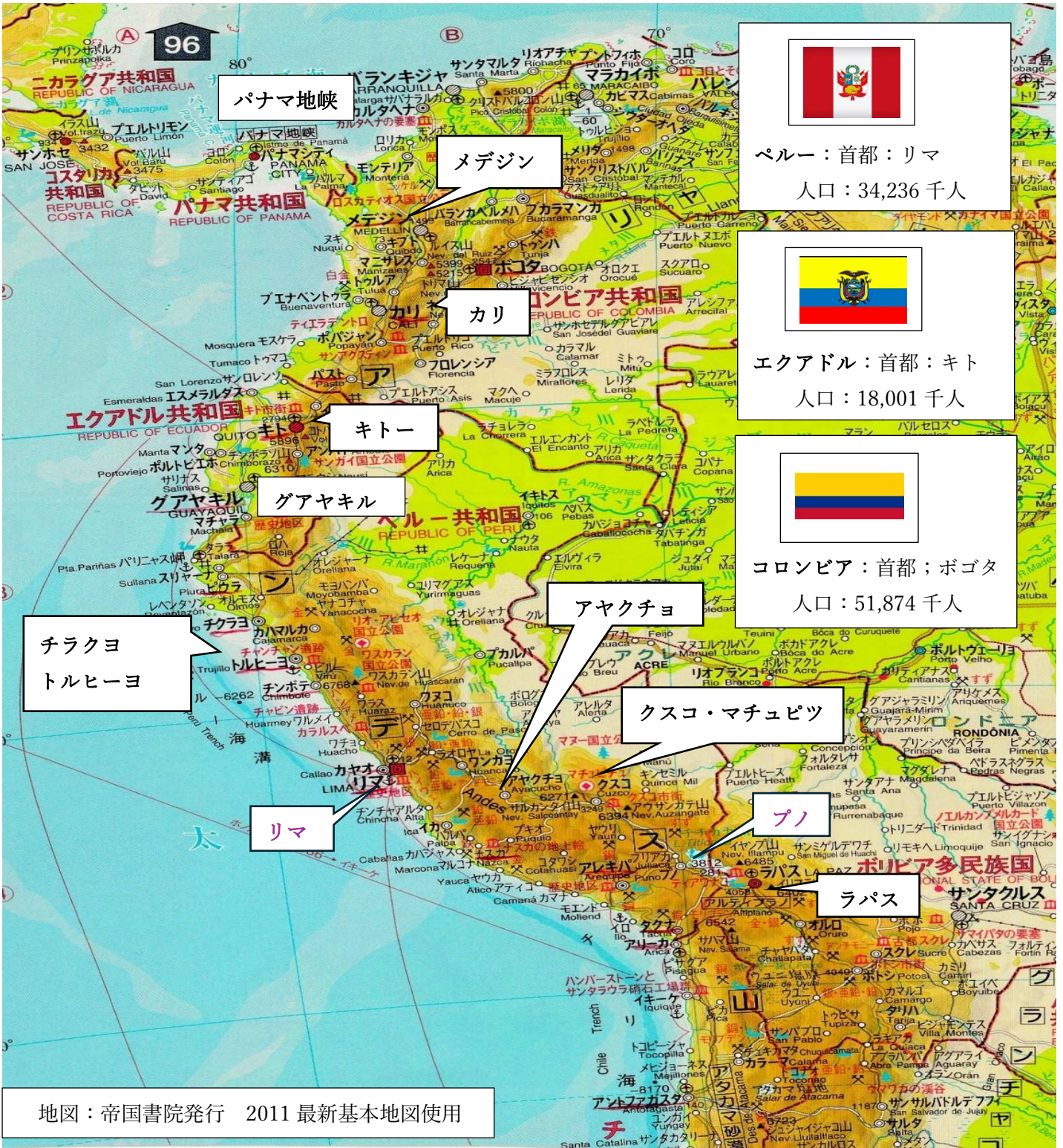


ジョージ・ミーガン 世界最長の徒歩旅行 南北アメリカ大陸縦断3万キロ

その2 ペルー・エクアドル・コロンビア



パナマ地峡

メデジン

カリ

キトー

グアヤキル

チラクヨ
トルヒーヨ

アヤクチョ

クスコ・マチュピツ

リマ

プノ

ラパス



ペルー：首都：リマ
人口：34,236 千人



エクアドル：首都：キト
人口：18,001 千人



コロンビア：首都：ボゴタ
人口：51,874 千人

地図：帝国書院発行 2011 最新基本地図使用

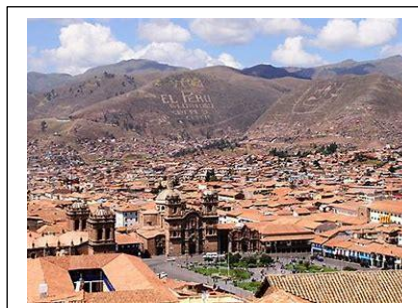
ペルー

1978年4月末、ペルー国内に入った。あらかじめラパスの英国領事館で今回の旅行の趣意書を作成してもらっていたので、比較的スムーズに入国出来た。歩く後から子供たちがズロズロかたまって、はやしたてながらついて、小石まで投げつけられた。ケチュア語だから何を言っているのかは分からない。プノに着いた。プノはチチカカ湖周辺の

観光の根拠地である。観光団の一員に加わり観光。プノから**フリアカ**という町に着いた。野営に備えアルパカの毛皮を購入した。フリアカを通過してから、靴擦れ、腹痛、日中の暑さと夜の冷え込みに参ってしまい、日増しに痩せて行った。また、強盗にも遭ったが運よく通りがかりのトラックの運転手に助けられた。そうこう何とかして**クスコ**に着いた。クスコはかつてインカ帝国の首都である。ラパスで出会った人から、ドン・ゲバラ宛の紹介状を貰っていたので、一週間ほど、ゲバラ家に滞在した。5月29日はキリスト聖体の祝日で行列を観に行った。また、サクサウアマンの要塞、**マチュピチュ**まで汽車で片道4時間の観光旅行をした。クスコを出発してから不運の連続だった。手押し車の車輪が破損してしまうトラブルやインディオの家に泊めて貰ったりした話の記述が縷々あるが割愛する。



プノ チチカカ湖



クスコ (へその意)



マチュピチュ

やがて**アヤクチョ**の町に着いた。次に着いた**ラ・オロヤ**は銅精錬所がある町だった、町を出て長い坂を上り、**チクリオ峠**の頂上(標高4,843m)は、これまで歩いた南北両アメリカの中でも最も高い峠だった。今や、ペルー国内だけでも、アンデスをすでに1300km踏査し目指していた最後の山岳砦を制覇した。これから先は、リマ、そして、太平洋岸に向かって、山道をひたすら下るのみである。



アヤクチョ 海拔 2731m

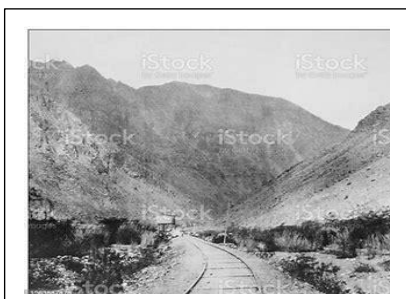


ラ・オロヤ 海拔 4,000m



チクリオ峠 ペルー最高峰道路地点

リマ州に入ってから一日40kmの行程を楽々歩いた。**ラ・オロヤ**とか**カヤオ**との間は1893年に完成した146kmの鉄道があり首都**リマ**に入った。リマを後にすると車の往来は疎らとなった。北部の砂漠地帯では道路は舗装されていて、1,000kmほどにわたって真っ直ぐに伸びている。最初の町は保養地**アンコン**だった。その先、道は二手に分かれた。右手は**パン・アメリカン・ハイウェイ**、左手は海岸沿いの道となる。**プエルト・スーペ**の町近くで出発点から8000kmに達した。**チンボテ**から**トルヒーヨ**までの距離は130km、途中、店など何一つなく野宿した。さくさくした砂地でテントを張るには苦勞した。**トルヒーヨ**は観光地にもなっていて、前インカ、**チェム**王国の首都**チャン・チャン**の遺跡があった。降雨量は50年に一度くらいほんの少し雨が降る程度だという。



ラ・オロヤ〜カヤオ鉄道開通当時



リマ

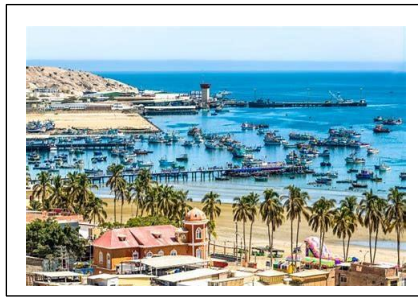


トルヒーヨ

トルヒーヨを過ぎてから砂漠ばかりで一日 40 kmの目標地点も砂漠ばかりで精神状態に影響しはじめた。猛暑に見舞われ日が陰ってから歩き、州都**チクラヨ**に入る前日、猛暑に見舞われている最中だということ分った。日が陰ってから歩き、緑のオアシス、**ピウラ**市に着き、在エクアドル領事からエクアドル入国ビザと地図を受けとった。次にスヤナに着いた時、道が二つに分かれていた。左手パンアメリカン、右手は国境の町**ラクナ**まで近道だった。しかし近道を選んだのが間違いだった。今で通ったこともない道で深い砂で足をとられた。大腿部まで砂にとられることもあった。道に沿って砂で埋まった用水路が走っていた。ユーゴスラビアの援助による緑地化計画の一環であった。道の行き止まりが**ラス・ロマス**であった。途中、地形調査をしている地質学者に出会った。ウラニウム資源を探査しているとのことで、冷たい水を飲ませてくれ、精密な地図を示して道案内してくれた。疲れ、やつれ果て、マカーラ川に面した国境の町**ラチナ**に着いた。1978年9月20日、国境を越えた。



チクラヨ



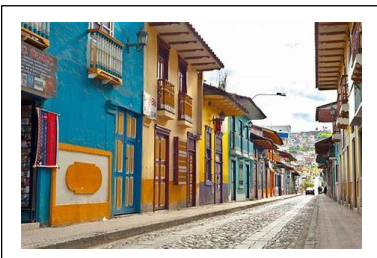
緑のオアシス・ピラウ



国境の町ラチチ

エクアドル

ペルーを離れ、マカーラ川を渡ってエクアドルに入った。背後にペルー北部の広漠たる砂漠が続き、行く手には樹木が鬱蒼と生い茂る熱帯地方独特の景観が展開していた。エクアドル人の生き方は、スタイルのみならず実態そのものがペルー人と趣を異にしている。入国に際し、現金 1000 ドルを持っていなければならぬというトラブルがあったが、滞在 30 日間の許可を得た。国境の町、マカーラはペルーに比べて、はるかに活気があった。マカーラで一夜を過ごし、180 kmの山岳道路を州都**ロハ**に向かった。途中、エクアドル人の生活水準の高さに驚いた。大油田の開発とともに OPEC の一員として「バナナの国」のイメージから変貌しているのがあった。ロハ市を出てから連日、乾期というのに雨の連続であった。



ロハ

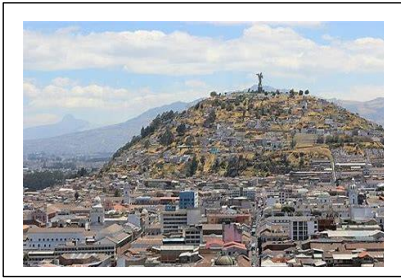


クエンカ



グアヤキル

エクアドル、第三の都市**クエンカ**に 10 月 4 日到着、一人旅をしていることが報道されていたからか、至るところで握手を求められた。南米中をバイクで走り廻ったという青年に出会った。気があい経営する農場に厄介になった。二人で**グアヤキル**（首都）にドライブし停泊中のイギリス商船を訪ねたが、つれない対応でひどい幻滅感を味わった。牧場を後にしてからは山岳地帯を離れてしばらく海岸沿いの地方を歩くことにした。高温多湿の低地では雨季には平原一帯が水浸しになるので、竹製の住居が高い脚柱の上に乗っている。住民はインディオ系が少なくなり、黒人とクリオール人（移住したスペイン人と黒人の混血）が占めている。驚いたことはこの国に住むインディオの種族の数の多さだった。



キトー



赤道



インディオの女性

キトーの町は車の往来が多く大量の排気ガスで喉を傷めてしまった。11月2日、ヨシコからの手紙を受け取る。子供の名はアユミ、早く帰って欲しいというのが、ヨシコの父親は男として帰って来いと言わぬという。キトーでは牧師の家に宿泊。11月14日、赤道直下に到着。15,000 kmに達した。エクアドルで受けた印象、インディオの人たちは、気前がよく、親切で、人なっこい人達であった。エクアドルでは野営することは殆どなかった。

コロンビア

コロンビアは入国者に出国証明の提示を求めると言うが、用意していなかったが、国境検札官は愛想よく迎え入れ3カ月滞在を許可。コーラ2本とチョコレートまでくれた。国境の町イビアレスでは兵隊の暴漢に遭い、早々に次なる町バストに向かった。でこぼこした灰色の舗装道路みちであったが、大地は起伏に富み景色は緑一色でアイルランドを思い出させた。しかし、野営してよいと言われた家でカメラを強奪された。警察に届けたが、どうしようもないという。バストを後にして、一日43 kmの行程を経てパティアの町に入る。低湿地帯に入り猛暑に悩まされる。ポパジャンの町は周りをサトウキビ畑で取り囲まれた町であった。かってスペインからの入植者がこの土地を選んで農園を切り開いたことに納得した。やがてカリ市に到着した。ボゴタ、メデリンに次いでコロンビア第三の都市である。警察に頼み敷地内に野営、最も安全な宿泊所であった。町の新聞に徒歩旅行している記事が出て、ちょっとした有名人になり、街を歩くと悪ガキどもがハメルンの笛吹きのようにゾロゾロついて来た。都会生活の魅力に心をひかれながらもカリ市を出発した。(ポジャン、バストとも画像なし)



カリ市



カリ市内



サルサ カーニバル

12月21日、メデリン市に到着。それから約2カ月にわたって滞在した。1月21日(1979年)メデリンを出発。市街を囲んでいる山の一角に登る。イギリスの春を思い起こさせるような風土だった。次いでコロンビア北部を南北に走るセントラル山脈を2日間に渡って踏み越え、西側の谷を下り、サンタ・フェ・デ・アンティオキアに着いた。アンティオキア州のあちこちでは、肌の黒いのに顔は金髪の子供がやたら多かった。メデリンを出て10日目、分岐点エル・ティグレに辿り着いた。全長11,454 kmにおよぶ南米縦断の道はここに終わりを告げた。バスでメデリンに戻り、いよいよ、コロンビアとパナマを結ぶダリエン地峡縦断の準備に取り掛かった。4月になるとダリエン一帯が雨季になるので、遅くとも3月末までに通らなければならなかった。地峡縦断には強力な同行者が必要であった。ジャングルの経験があり警察に勤務したことがある陰気な感じではあるがハイロ・モリーナという男が見つかった。また、ア

メリカドル、しかも現金しか通用しないと言われて 500 ドル用意した。



メデリン遠望



メデリン 市庁



コロンビア女性

以上：写真はいずれも無料画像使用しました。 冒頭、地図は帝国書院発行 最新基本地図 2011 使用)